

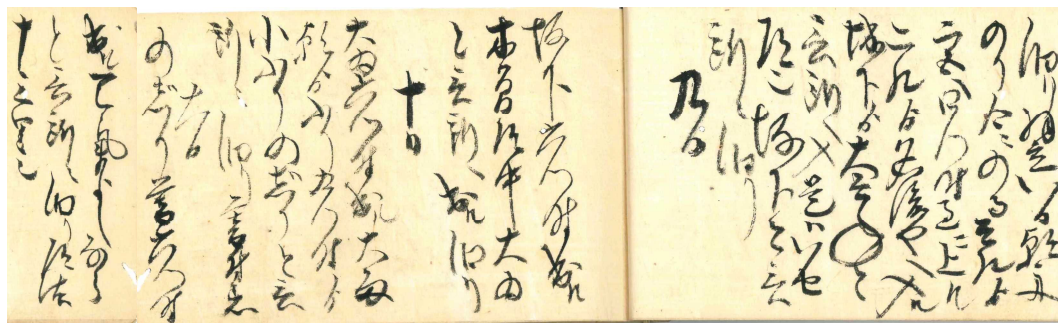
郷土の古文書

その 40 伊勢参宮道中日記 (四)

編集・発行：五日市郷土館

あきる野市五日市 920-1

発行：令和7年5月20日



解説文

翌八日朝舟

のり合三のる それ方

宮(四ツ時過三上ル

これ方名後やへ入ル

城下方大そねと

言所へ入 是ハいセ

道也 坂下と言

所泊り

九日

坂下六ツ時出ル

木曾道中大る

と言所へ出ル 泊り

十日

大る六ツ時出ル 大雨

朝方ふり 九ツ時方

小ふり のじりと言

所泊り 暮時着

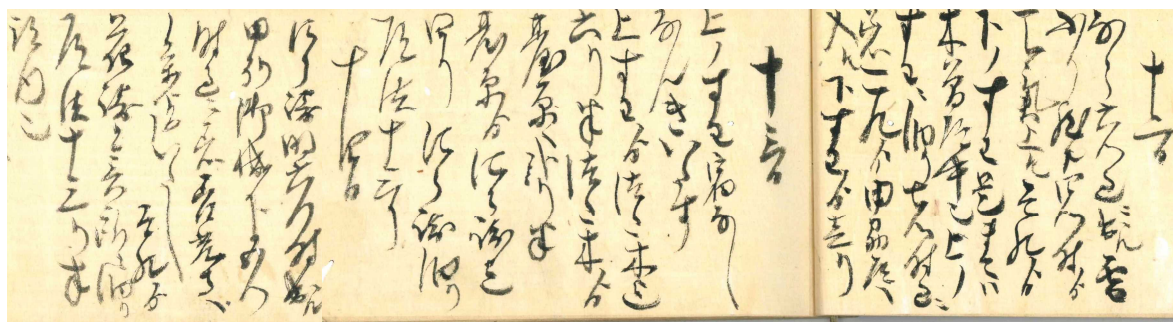
十一日

のじり暮六ツ時

出ル 天気よし なら

と言所泊り 道法

十三里也



十二日

なら六ツ時出ル 雪

ふり 然共四ツ時方

天気上ル それ方

下ノすわ 是までハ

木曾道中也 上ノ

すわ泊り 七ツ時過

着 これ方甲州道へ

入ル 下すわ方壱り

十三日

上ノすわ 宿なし

なんきいたす

上すわ方つた木迄

六り半 つた木方

臺原へ式里半

臺原方なら崎迄

四り なら崎泊り

道法十三里

十四日

なら崎明六ツ時出ル

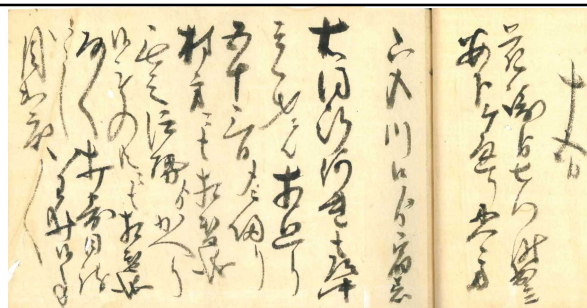
甲州御城下五ツ

時過三着 善光寺へ

参詣いたし それ方

花崎と言所泊り

道法十三里半



十五日

花崎方七ツ時出立

安下ヶ通り 恩方

山入 川口方宿着

右同行何連も道中

そく才にて相廻り

五十三日メニ帰り

村方ニも相替儀

無之 伊勢方かへり

候もの共ニも相替儀

なく打寄日待

いたしいわい候事

目出度



甲斐善光寺

3月8日朝一行は乗り合いの船が出たので桑名を出発、熱田の渡(七里

の渡)を経て宮(熱田)へ10時過に着きました。この渡場には桑名との通船と海上の取締りのため尾張藩が熱田の浜に設けた番所があり、出入りの船を改めていました。所定の手続きを経ないと通行出来なかったことは、箱根や荒井の関所と同様であったといい、一行も所定の手続きで時間を費やしたことでしよう。

宮には皇位のしるしとして、代々の天皇が伝承する三つの宝物、三種神器の一つ「草薙剣」を主神とするといわれる名高い熱田神宮があり、これより名古屋城下へ通る道筋なので一行も、記録にはありませんが参詣したのと思われま

す。その後一行は名古屋城下に入り城や街並を見物すると急いで伊勢街道を西へ進み大曾根へ入り、愛知県の坂下で泊っています。

翌9日朝6時に宿を出て、これより木曽街道の大井宿で泊りました。10日は朝より大雨でしたが大井宿を6時には出発し、昼頃には小雨になり長野県に入り野尻に暮時に着き泊ります。11日野尻を朝6時頃出

発、良い天気にもぐまれ奈良(奈良井)宿に泊ります。ここまで野尻より13里(52km)天気が良かったとはいえず、一気に帰りを急いでいる感じです。

翌12日奈良井宿を朝6時過雪の降る中出発しましたが、幸い10時頃より雪も止んだようです。それに付けても、今までの道中で雪降りの記録はこの時一回しかありません。そのかわり雨にはよく降られ、この時期割合暖かい気候だったのかと推測されます。下諏訪迄歩き、それから1里で上諏訪に着いたのですが「宿なし、なんぎいたす」とあり、やっと宿にありつけたようです。ここよりいよいよ甲州道中に入ります。13日上諏訪より葛木・臺原・葦崎まで13里(52km)を休みなく歩いた模様です。

江戸時代後期から明治期頃迄の伊勢参りの帰路には滋賀県草津から中山道を通り、長野県追分迄行き、そこから北国街道を進んで長野善光寺を参詣し、戒壇めぐりなどする事が定番のようでしたが、今回の参宮は、それより100年、150年も遡りますので、まだ道や乗物、宿等の整備も大分遅れていたと思われます。それから察すると相当体力も消耗し、伊奈村講中一行は、ここまで来たら少しで

も早く無事に伊奈の宿へ帰り、心身ともに休みたかったのかと思われ、長野善光寺へは寄った様子がありません。

一行は14日朝6時に葦崎を出発甲州城下へ午前8時過ぎに着き近辺を見物したと思われます。そして甲斐善光寺を参詣して花咲へ泊ります。これまで葦崎から又々13里(52km)を歩き続けています。15日朝4時に花咲を出発し、それより一行は上野原宿より和田峠(案下峠)に登ります。峠から道は二手に別れ、一方は南側の山道を下る佐野川往還(陣馬街道)を案下川に沿って進みます。また、もう一方は北側の山道をつて進み高留番所の手前で南側から来た陣馬街道に合流します。

ところで『新編武蔵風土記稿』の上恩方村の関梁の項には「此関ニカ、リ西方ニテ二條ニ別レ一條ハ相模國津久井へノ往還ニシテ又一條ハ村ノ北ノ方小名醍醐ノ辺へ通セリコレ甲州へノ往還ナリ」と書かれているところから、甲州より帰る一行は峠から北側の山道を下り醍醐を通って高留の番所の少し上流で南側より下つてきた陣馬街道に合流する道を通つたと思われます。これより100m程

案下川左岸の陣馬街道を進んで高留という口留番所に着きます。この番所は甲州への脇往還として、甲州口を警備するため往昔北条氏が案下峠に設けていた番所を徳川氏が継承して警備にあたりました。その後この高留に移し、番頭二人(案下川右岸に小川家、左岸に尾崎家)が置かれ、下番人として村人の内より当時36人が警衛にあたりました。恩方を出ると北浅川の上流山入川を渡り、ここより戸沢峠を超えて川口川を渡ります。そこから川口川を少し上流に遡り、峠を越えて網代村を通り、懐かしい故郷伊奈宿へ、約60kmの道のりをゆっくり休んだ様子もなく帰つてきたのです。実に連日50km以上の道を歩くという現代人には信じられない強行軍です。その後の文章から察するに、一行の者達も出迎えた村方の人達も変わりなかったことに喜びあり、後日と思われませんが、お祝いの日待の席を設け一同寄り集まっています。全員無事帰れた事や長旅の話に花を咲かせ、その酒宴の賑わいと人々の喜びはいかばかりだったのでしょうか。最後に「めでたし、めでたし」と結んでいます。

金五兩貳分ハ 祝儀
一金壹兩貳分ハ 卷錢
一金壹分 明志やう茶や
一金壹分 ニミ茶や
一三百文 内宮茶や
一百文 山の中茶や
一金貳分 朝熊茶や
一七百分 非人仕切
一金三分 籠かき
一金壹分 案内衆
一七百分 一宇田茶や
一三百文 宮川の茶や
一貳百六百分 田名舟ちん
一九百八拾八文 ふじ川
一壹百三百七拾四文 阿らい
一貳百九百七拾五文 宮舟ちん
一三百廿五文 大井川
一三百三拾貳文 江戸迄也
舟ちん

金五兩貳分ハ 祝儀
一金壹兩貳分ハ 卷錢
一金壹分 明志やう茶や
一金壹分 ニミ茶や
一三百文 内宮茶や
一百文 山の中茶や
一金貳分 朝熊茶や
一七百分 非人仕切
一金三分 籠かき
一金壹分 案内衆
一七百分 一宇田茶や
一三百文 宮川の茶や
一貳百六百分 田名舟ちん
一九百八拾八文 ふじ川
一壹百三百七拾四文 阿らい
一貳百九百七拾五文 宮舟ちん
一三百廿五文 大井川
一三百三拾貳文 江戸迄也
舟ちん

解説文

（今後参宮する人のための心得書）
向後参宮之節
為心得道中ニ
難儀之筋 又手都合
宜敷事を左ニ記
一道中ニ而朝ハ明ケ
七ツ時出立 晩者
七ツ時ニ泊り候様ニ
心懸ヘシ
一道中急キ候得ハ
草臥もの大分
有之ものニ候得ハ 大
屈ニ而之候共必々
道急キ申間敷候事
一物而川越前ニ而人数
相改メ可申 同行
之内草臥ものを
先立立可申 必々
不達者成もの跡ヘ
廻し申間敷候
一日々宿を罷出候節
おも立候もの 跡方
出テヘし 取落
ものかならず有之
ものニ候 惣而道中
にても おも立候
もの草臥候もの
有之候ヘいたわり
先立罷越申間敷候
一日ニ三度ツも同行
人数を改メヘし
同行之内口論等
かならずツし
み可申者也

先格入用扣

一金四拾貳兩 御神楽金
一金貳兩 御供料
一金貳拾兩 坊入
一金貳兩 卷錢
一金六拾六兩ハ先達而宇野甚右衛門殿
申合候間右金高無相違相勤可被申候
一金三百疋 奥方
一金五百疋 御子息方
一金七百疋 宇野甚右衛門殿
一金百疋 同人御内方
一金百疋 同人子共衆
一金貳百疋 同人下代兩人
一金參百疋 給仕衆
一金五兩貳分也
一金百疋 明所茶屋
一金銅貳拾疋 内宮茶屋
一金銅五拾疋 一宇田茶屋
一金銅三拾疋 とふけのちや屋
一金百疋 朝熊の茶屋
一金銅貳拾疋 山神の茶屋
右六ヶ所茶屋
祝儀甚右衛門殿へ聞合
右見合いたし可申候
一金銅五拾疋 参宮之節案内之衆
一金貳百疋 籠かき
是ハ一日老人五十文
くらいつ、可遣候
一金銅五拾疋 悲人仕切
一青銅三拾疋
是ハ太夫殿ニ而
けん御はらい五百本
相調可申候
右之外

御はらい入候 ひと
式ツ
右包候油かミ代
細引代
御はらい江戸相廻候
舟ちん江戸宿
四ツ谷傳馬丁式丁目
いつミ屋甚兵衛方迄
かミゆいせん
右之外一同舟ちん
諸事一同之入用ハ
庄兵へ方可出候
右之通先格を以
書出シ候得ハ相違も
有之間敷候 然とも
宇野甚右衛門殿江
相談したし 差図
請相勤可申事

右入用大積り
合金七拾三兩余ニ
可有之 少々之義ハ
格別 大違無之様ニ
相勤可被申候
子ノ正月吉日
一金百疋 上村源右衛門
万度御祓頂戴
諸事入用此帳面ニ
記 下向之節勘定
可相立者也
一金七拾四兩 宇野甚右衛門殿江預ケ金
此私
金六拾四兩ハ 御神楽金
頭人
御供礼

（覺書）
京方大津へ三り
大津方くさへ三り廿四丁
くさつ方いしへ三り
いしへ方みな口へ三り廿六丁
みな口方つち山へ三り廿五丁
つち山方坂下へ三り半
坂下方せきへ一り廿七丁
せき方かめ山へ一り半
かめ山方せうのへ二り
せうの方右やくしへ廿五丁
（庄野）

